

日本慈善世界

日本ツーチーセカイ

2024年02月10日出版

第183期

主題報導：能登半島地震賑災





上人開示

人藉此機會觀摩學習各地的經驗，發心立願要在當地傳揚慈濟精神，走入人群力行菩薩道。他們分享自己投入慈濟的緣由，有的因受援助而被愛接引，有的因參與行動而感動，衆人有了與慈濟共同的「因」，並以菩薩情相互牽引，很重視彼此的「緣」，即使路遙也不離長情大

多年來，我年年有三願，祈求「人心淨化、社會祥和、天下無災難」，希望「大愛包容地球村」。逾半個世紀裡，常見慈濟人走進苦難之地，展開雙手擁抱、膚慰長者或孩童，畫面是多麼親切感人。大家不分種族、不分宗教、不分國界，牽連起你的心、他的愛、我的情，

後代子孫接續往前行。

來自十多個國家的這些慈濟

人間的這分情很奇妙，儘管距離遙遠，也可以拉近，實在不可思議。日前行腳到北部，喜見海外各地的培訓志工返回臺灣受證。其中有人需要經歷三十個小時以上的飛行、轉機，如此遠道而來，聽到就覺得感動；也有人生活不富裕，需先向人商借旅費，再做工償付，可以想像要來一趟並不容易，過程是多麼辛苦，這分誠心誠意，真的令人既感動又感恩。

愛，所以不遠千里來相聚。志工們互相見證，彼此分享，有人出身窮困家庭，所處社會也不安定，如今接觸了佛法，化解心中的不甘，能理解每個人都隨因緣而生，生命本就是變化無常。過去生所造的因，結果會在此世顯現，無法移轉，但是我們這一生可以好好造福，改善未來，種好因自然得好果，多做善事也能讓自己快樂、歡喜，感到心安自在無罣礙。

儘管素不相識也能相親相愛。志工們不只愛護、救濟貧病孤老的人，也為煩惱者開解心結，如此不是用法消弭衆生苦，讓大愛鋪滿人間嗎？

期望大家都能走入慈濟，不一定要改信佛教，同樣可以安心信仰原本的宗教，因為一切正信宗教精神都同樣是「愛」，闡揚的也許是博愛、仁愛或是無私大愛，都能引導我們轉變自己，朝向覺悟的道路。



朝向覺悟的道路

2024年

三月 March

◎東京23区 ◎関西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3 清掃活動 09:00-12:00 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	4 代々木炊き出し配布 9:30集合 (読経)《薬師経》 10:30-12:30(読) (読経)《薬師経》 10:30-12:30(読)	5	6 (読)仏典系列 13:30-15:30	7 写経 13:30-15:30	8	9
10 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 料理教室(枚方) 10:00-15:00 料理教室(尼崎) 10:00-17:00 大阪西成区炊き出し・夜回り 14:00-18:30	11	12 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	13 (読)仏典系列 13:30-15:30	14	15 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※ 20:15-22:00	16
17 中国語子供クラス 10:00-12:00 ボランティア研修 09:00-17:00 ボランティア研修 09:00-17:00	18 代々木炊き出し配布 9:30集合	19	20 (読)仏典系列 13:30-15:30	21 写経 13:30-15:30	22 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※ 20:15-22:00	23 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※ 20:15-22:00 大阪西成区夜回り 17:00-18:30
24 中国語大人クラス 13:00-15:00 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※ 20:15-22:00	25 うらら障礙者昼食交流 10:00-13:00	26 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	27 (読)仏典系列 13:30-15:30	28	29 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※ 20:15-22:00	30 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※ 20:15-22:00
31 中国語大人クラス 13:00-15:00 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※ 20:15-22:00						

四月 April

◎東京23区 ◎関西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
	1 代々木炊き出し配布 9:30集合	2 (読経)《薬師経》 ※10:30-12:30 (読経)《薬師経》 ※10:30-12:30	3 仏典系列 13:30-15:30	4 写経 13:30-15:30	5	6
7 清掃活動 09:00-12:00 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00	8	9 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	10 仏典系列 13:30-15:30	11	12	13
14 中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 大阪西成区炊き出し・夜回り 14:00-18:30	15 代々木炊き出し配布 9:30集合	16	17 (読)仏典系列 13:30-15:30	18 甲子園写経教室 13:00-15:00 写経 13:30-15:30	19	20
21 ボランティア研修 09:00-17:00 ボランティア研修 09:00-17:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 中国語子供クラス 10:00-12:00	22 うらら障礙者昼食交流 10:00-13:00	23 大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	24 (読)仏典系列 13:30-15:30	25	26 (読経)《地藏経》 ※20:15-22:00	27 (読経)《地藏経》 ※20:15-22:00 大阪西成区夜回り 17:00-18:30
28 (読経)《地藏経》 ※20:15-22:00 料理教室(枚方) 10:00-15:00	29	30				

※(読経)→下記ウェブサイトリンクよりご視聴ください。 <https://connect.tzuchi.im/dharma/>

(読)→読書会

*上記表は予定が変更になる場合がありますので、参加する前に必ず事務局までお問い合わせ下さい。

01

TZUCHI IN JAPAN



悟りの道へと進みましょう

訳／金子昭

人間同士の感情というのは不思議なものです。どんなに距離が離れていても、近くに引き寄せられます。これは本当に不思議なことですね。数日前、台湾北部に参りました時、海外各地の見習いボランティアの皆さんが台湾に委員証を授けられるために帰ってきている姿を見て嬉しく感じました。その中には、乗り換えを含め飛行機で三十時間以上もかけて、遠路はるばる来て下さった方もあられて、私はとても感動いたしました。また暮らし向きが豊かではなく、人から旅費を前借りし、後で働いてお金を返すという人もいて、台湾に来るのがいかに大変なことであるかが想像できました。その過程はどれだけ大変だったことでしょう。皆さんのこの誠実な心に、私は感謝し、またとても感謝しています。

慈濟人たちは、この機会を捉えて各地の経験をお互いに学んだりして、現地で慈濟の精神を宣揚し、人々の中で菩薩道に努めていくという願を立てました。皆さんは、自分たちが慈濟に加入した縁について語りあいました。ある人は援助を受けて、その愛に引き寄せられたこと、またある人は活動に参加して感動したことなどです。だれもが慈濟と共通の「因」を持っていきます。そして菩薩の情をもってお互いに引き寄せられ、お互いの「縁」を重視するのです。たとえ道のりははるかであっても、熱い思いや大きな愛をたえず持ち、千里の道を遠しとせず、ここに集まってきたのですから。

いないという人でした。それが今ようやく仏法に触れて、心の中のわだかまりもほどけたと言います。そして、人の生れは因縁で決まるけれども、いのちは本来変転して止まないものだとして理解できるようにしました。過去に作られた因果はこの世で現われます。これは動かさません。しかし、私たちはこの一生で、しっかりと幸せの元を作り、未来を改善することができのです。良き因の種を蒔けば自ずと良き果を得られ、善き事を数多く行えば自らも幸せになり、喜びがあふれ、心は自在となって何の気がりもなくなるのです。

長年、私は三つの願を立ててきました。「人の心を浄化し、世の中を平和にし、天の下に災難が起らないように」と祈ってきました。そして「大きな愛が地球村を包み込むように」と願ってきたのです。半世

紀以上が経って、慈濟人が苦難の地に向かい、両手を広げて老人や子供を抱きしめ、慰める場面が常に見られるようになりました。そうした姿はどれだけ親しみを感ぜさせ、また感動を与えることでしょう。だれもが民族や宗教の区別、また国境を超えて、お互いの心や愛や思いを巻き込み、たとえ一面識なくもお互いに親しみ慈しみ合っているのです。ボランティアたちは、ただ貧病孤独や高齢の人たちを優しくいたわり、救済していくだけではありません。悩み苦しむ人たちのために、心の葛藤を解き放ちます。これこそ、仏法をもって衆生の苦を消し去り、大きな愛を世の中に敷き詰めることにならないでしょうか。

でもよいでしょう。これらはいずれも私たちが自己の向きを転換し、悟りの道へと進むよう導いてくれるもののなのです。

私たちが皆、慈濟という大きな家庭の中で幸せを分かち合っています。たとえ過去に心が迷い、心が乱れることがあったとしても、今では縁を得て、人生の正しい方向を受け入れ、道理をしっかりと理解し、そ

悟り



■ 2人のシリア人ボランティアとトルコの初めてのボランティアが台湾に委員証を授けられるために帰ってきた。3人がイスラム教徒の礼儀作法で右手で名札を證嚴法師に渡し、法師への純粋で最高の敬意を伝えた。写真／花蓮慈濟本部提供

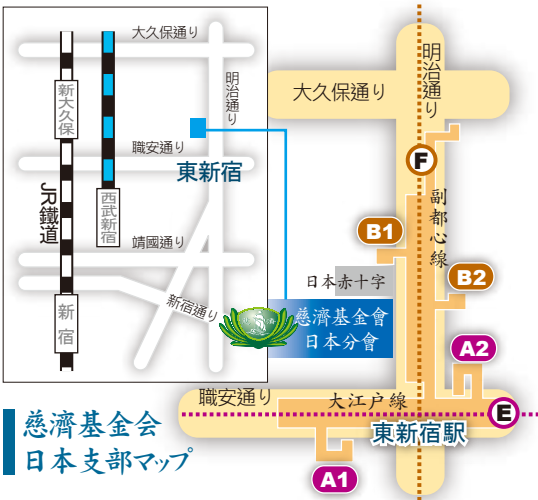


2024 年 02 月 10 日 発行 183 号
 発行人：釋證嚴
 発行所：台灣佛教慈濟慈善事業基金會 日本分會
 編集メンバー：
 許麗香 張秀民 陳靜慧 王秀寧
 陳詩萍 小野雅子 吉本富美 黃韻璇
 王姿文 簡毓嫻 一圓晃子 莊雅婷
 滝古道信 池田浩一 慈 涓

《上記以外のご協力の方にも感謝致します》

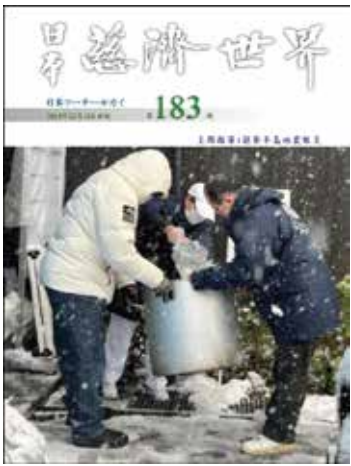
住所：〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16
 電話：03-3203-5651
 FAX：03-3203-5674
 E-MAIL：tzuchi@tzuchi.jp
 郵便口座：00190-4-753352
 口座名義：仏教慈濟基金會
 ブッキョウジサイキキンカイ
 時間：毎日 9:00 - 17:00
 HP：http://tw.tzuchi.org/jp (日本)
 HP：http://www.tzuchi.org.tw (台湾)

いつも「日本慈濟世界」にご支援頂きありがとうございます。
 これからもご協力下さいますよう、
 宜しくお願い致します。



【日本慈濟世界】
ホームページ

CONTENTS



表紙写真：

今回の支援に向けて、私たちが出来るだけ早く活動を始められたのは、沢山の方々のお力添えと団体による長年の炊き出し経験があるからだ。それに、何よりも被災された方々の無力さや苦しみを自分のように感じ、なんとしても栄養のある温かい食事をとってほしいという上人の思いと支えがあるからだ。支援報道に関して、NHK とテレビ朝日をはじめ、北陸、北国、産経新聞等のメディア関係者は、私たちに問いかけた。台湾発祥のボランティア団体はなぜここに来たのか。「純粹にそうしなければと思う一心だった」と、私たちは答えた。

写真 / 鍾佳玲

上人開示 (證嚴法師の教え)

- 01 朝向覺悟的道路 釋證嚴
- 02 悟りの道へと進みましょう 金子昭

主題報導 (トピックス)

- 06 二〇二三年度回顧 黃韻璇 張秀民
- 22 日本支部二〇二三年振り返り 邵世軒
- 08 能登半島地震援助記事 陳思道 慈涓
- 24 能登半島地震災害支援の記録 岩村益典
- 10 能登半島地震援助一 因縁與上人開示 許麗香
- 26 能登半島地震災害支援一 因縁と上人開示 王譽秦
- 12 能登半島地震援助二 合作共善 許麗香
- 29 能登半島地震支援二 みんなで協力 岩村益典

- 13 能登半島地震援助三 許麗香
- 穴水町二處發放因縁
- 30 能登半島地震災害支援三 岩村益典
- 穴水町二カ所に炊き出しの因縁
- 14 能登半島地震援助四 許麗香
- 中能登町古民家因縁
- 31 能登半島地震支援四 岩村益典
- 中能登町古民家の縁

活動報導 (活動報道)

- 15 二〇二四祈福感恩會 岩村益典
- 32 二〇二四祈福感恩會

日本慈善關懷 (日本慈善志業)

- 17 日行一善 小錢行大愛 施燕芬
- 29 一日一善 少額で大きな愛 吳俞輝
- 18 心繫街友 冬令送暖 陳雅琴 慈涓 黃韻璇
- 36 寒い冬に心を込めて 街友に温もりを提供 朱家成
- 20 臘月寒冬溫暖味 歲末圍爐道感恩 陳雅琴
- 38 十二月寒い冬の中 身体も温まる味 年末の団欒に感謝 真鍋誠

相片故事 (写真ものがたり)

- 39 能登賑災街頭募款 鄭文秀

日程表

二〇二四年三、四月行事曆 王昆京

日本分會二〇二三年度回顧

撰文／張秀民 黃韻璇

回首二〇一三年，真的不可思議！日本分會的小小法船，齊心合力，航向弘法利生的彼岸。

大愛食堂 幸福的滋味

近一年來「大愛食堂」每月二次發放，從設計菜單、採買到完成，由九個協力組的志工們輪流承擔。除了推廣素食外，更深入社區為暗角裡需要幫助的人，傳遞真情和溫暖。

慈悲送暖 社區菩薩大招生

今年日本分會熟食及冬令物資發放從十一月底開始於四大社區進行：東京都的代代木公園、埼玉縣川口市、神奈川縣的壽町公園、以及關西大阪的西成區，希望能深入各地區的暗角，照顧到社會的弱勢

會了解慈濟宗「人間佛教」的意涵，導覽的終點是「弘法利生」區，展示慈濟在佛國尼泊爾的「零輟學計畫」及大眾的募心募愛。

人文參訪 來日交流座談

慈濟科技大學、台南慈濟小學、吉隆坡慈濟國際中學等來日參訪交流，介紹慈濟的人文如何在學校團體中落實，也分享日本分會推廣志業的點滴及成果。學生們也到日本分會當一日志工，開拓視野，見苦知福，留下生命教育的一頁。

異國慈青 淨山及夜訪

日本的慈青是一群來自不同的國家，有著不同的母語的年輕人。因為疫情而停止的都廳街友夜訪，在慈青學姊學長們的帶動下再次啟動，希望日後能成為社會中一股有力的清流。

舉辦義賣 眾人齊力

東京志工每年都會規劃「包素粽，

族群，也接引更多社區生力軍加入大愛的行列。

個案陪伴 用家人的心關懷

日本分會每年會接獲不少急難個案，透過付出，也是一次次的生命見證與學習。關西志工陪伴個案陳小姐在日本陪病母及繼父走完人生最後一哩路。「苦集」的示現，讓我們見證了唯有愛，方能滅苦。

另一個案，是著急的母親跨海電話求助，希望慈濟志工緊急協尋失聯兒。兒子順利回到家後，流著淚跟母親說，非常感恩慈濟人像媽媽一樣照顧他，以後也要做慈濟幫助人。看似平安圓滿完成任務，過程可是心驚膽跳，時時考驗志工的智慧。

監獄關懷 生命中的貴人

獻愛心」活動，今年賣出將近一萬顆素粽。關西志工今年也自行製作超過一千五百顆素粽義賣，粽葉、蘿蔔乾、素蠔油等日本不易買得的材料，靠著大家一批批手提過來。一顆顆粽子讓點點的愛心聚集，大愛串連。

此外，東京中華學校義賣志工們總動員，靜思書軒、人文教室兒童中文班、社會推廣教育等也一起共襄盛舉。因為新冠疫情影響，睽違三年的大阪春節祭，終於復辦，關西志工多年來都承擔會場的環保工作。

社區茶會 海外慈濟情

離東京日本分會車程約二個小時的群馬地區，八月底促成了一場入經藏演繹練習與交流茶會。名古屋在七月底也舉辦了鄉親茶會。於海外再遇見慈濟，來自華人鄉親的愛，化為菩提種子，現地發芽，盼能造福當地續善緣。

安住願力 廣淨佛國

志工們透過慈濟月刊及書信的交流，長期默默地陪伴著受刑人。在一點一滴愛的關懷下，有的受刑人也會在獄中跟其他受刑人介紹慈濟，也因此每個月幾乎都有新案件。

愛無所求 回慈濟的家

經濟富裕的日本也有暗角，為減輕弱勢家庭經濟拮据的壓力，日本分會開設「新芽助學金」，從二〇一七年至二〇二三年止，共嘉惠了六十九名莘莘學子，適時地伸出援手給孩子們，用心與他們互動互愛，相信就能將愛心的種子灑播。

遇見佛陀 找回清淨自性

五月份佛誕節時也同時舉辦「禮讚與感恩」慈善人文特展，希望讓更多人有機

《無量義法隨頌》經藏演繹，十月時連續三天於臺北小巨蛋演出，藉由唱誦、手語、音樂劇的方式詮釋經典，並將慈濟人間菩薩行跡和佛陀經文緊密結合。日本分會參加第六場，同步連線參加這場全球靈山大法會。

二〇二四年，證嚴上人給予的祝福是「弘法利生信願行，疏食共善護大地」，慈示人人要有完整的大愛，茹素不殺生，愛惜所有的生命。人人都是一閃一閃的小星星，配合起來就是一片亮麗的星河，以善以愛照亮全球，用心行在慈濟菩薩道上。



攝影／李月鳳

能登半島地震援助記事

能登半島



大阪

東京



◎ 熱食發放

4 梯次
共 7129 份熱食



◎ 志工動員

4 梯次
共 372 人次



◎ 加厚型環保毛毯、

圍巾、披肩。
共 204 套

2024/1/29 為止的計算

◎ 20240113

第一天於穴水町冥王星交流會館提供熱食。公立穴水綜合病院的島中公志院長前來商量，希望慈濟也可以公立穴水綜合病院等其他避難所提供熱食。志工前往醫院場勘後決定隔日分為 2 組人同時在兩個定點（冥王星交流會館、公立穴水綜合病院）提供熱食。

◎ 20240114

同時為公立穴水綜合醫院與穴水町冥王星交流會館提供熱食。

◎ 20240121

◎ -0126

日本分會於新大久保車站、大久保車站、新宿車站西口，為「能登賑災」舉辦街頭募心募愛活動。

◎ 20240128

NHK「早安日本」的新聞節目到穴水綜合病院直播採訪慈濟志工的熱食發放。朝日電視新聞報導（ANNnews）到冥王星交流會館直播採訪慈濟志工的熱食發放。
ANNnews <https://www.youtube.com/watch?v=CUHrXU0U648>

◎ 20240128

◎ -0131

大阪志工 7 位，於大阪天王寺車站募心募愛。1/31 志工 5 位，再於難波高島屋百貨前募心募愛。

◎ 20240129

20240129 結束公立穴水綜合病院結束熱食發放，第一階段的「能登賑災團」圓滿。志工拜訪穴水町吉村光輝町長、及中能登町宮下為幸町長，再次感謝提供住處，以及報告活動成果。

◎ 20240112

◎ -0129

第一階段的「能登半島賑災團」共 4 梯次志工 372 人次前往，總共提供了 7129 份熱食。

◎ 20240101

能登半島發生了芮式 7.6 大地震，造成了莫大的災害。證嚴上人於第一時間，電話關懷志工與會員，安住大家的心。

◎ 20240102

◎ -0108

上人於台灣行腳忙碌中，連日連線指導賑災方向。

◎ 20240104

與 JVOAD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）連線會議，了解災區狀況。

◎ 20240105

1 月 5 日陳金發、陳思道、盧建安、池田浩一，4 人前往七尾市與穴水町的災區勘災，拜會由大阪慈濟委員介紹的七尾病院診療部長陳文筆醫師，請益現狀。

◎ 20240106

透過陳文筆醫師的引介，並由陳太太帶領前往拜訪公立穴水綜合病院島中公志院長、中橋毅副院長及小林建史事務局長，了解當地的受災現狀。

◎ 20240111

慈濟志工陳思道及井田龍成，先進入穴水町接洽發放熱食的事宜。

◎ 20240111

透過陳文筆醫生的引介，中能登町宮下為幸町長馬上免費提供百年文化財古民家御祖之鄉（Mioyanosato）給慈濟人做宿舍。

◎ 20240112

慈濟志工至穴水町冥王星交流會館拜訪 JVOAD（全國救災志願者支持組織網路）的友人團體浦野愛女士，及穴水町社會福祉協會橋本美鈴女士，並與自行前往冥王星交流會館的石河直（經營烘培坊）與川島徹（經營義大利餐廳）兩位志工，接洽隔日在該避難所煮熱食事宜。

◎ 20240112

第一梯「能登半島賑災團」14 位，分別由東京 9 位、大阪 5 位志工出發前往能登半島，準備提供熱食發放。

◎ 20240112

陳文筆醫師陪同慈濟志工 9 人拜訪中能登町的宮下為幸町長，並由中能登町的職員帶領志工前往由中能登町，無償借給慈濟志工住宿的古民家 MIOYA 之鄉安單。

能登半島地震援助（一）

因緣與上人開示

撰文／許麗香



■ 2024年1月2日與上人視訊。攝影／林真子

一陣的天搖地動，遠在東京的慈濟人，也感受到三級的震度，隨著電視上海嘯的警報，大家的心越揪越緊。此時電話彼端傳來了證嚴上人慈悲的聲音，上人心繫著志工會員與大家是否平安。

進入令和六年的第一天下午四點十分，在石川縣的能登半島，震央七點六級離地表十公里的淺層地震，震醒了天地人間。原本過新年的光景是，寺廟前「初詣（新年參拜）」的人潮，還有從大都會返鄉，與年邁的父母或親友相聚的和樂時光。

勘災與賑災啓動

靠近日本海，風景秀麗的能登半島，是海產與漆器著名的觀光地區，對慈濟志工來說，卻非常陌生。一月五日，確認北陸新幹線正常行駛了，來自臺灣的志工陳金發，與陳思道、盧建安與池田浩一，向著茫茫的災區前進。在七尾醫院與石川臺灣促進協會的理事長陳文筆醫師碰面，由陳夫人陪伴進入穴水町。道路肝腸寸斷，政府雖在快速地搶通中，但車行的速度要比平常多三倍。十一日先遣志工再次前往災區，接洽熱食發放地點，隔天熱食發放團隊啓程。

這次能夠及時動員，除了來自各方貴人相助，以及我們長年的煮熱食經驗，最重要的是有上人的指導，不忍受災鄉親的無助與苦痛，只想在第一時間給予熱熱的一碗營養溫飽的飯。這也是NHK、朝日電視台，北陸與北國及產經等新聞媒體，所想要了解的：起源自臺灣的慈善團體，為何而來？我們就只是單純的一念心而已。

當志工一梯梯的前往能登災區，後方留守的志工，也在東北石卷、東京新宿、群馬，以及大阪街頭等各地，走上街頭募心募愛。

熱食發放第二階段

第一階段的熱食發放從一月十二日到二十九日。風光旖旎的能登半島，發放的第六天，難得一見紅紅的旭日從日本海東昇。想起上人在行腳中，多次連線叮嚀，要我們不要捨近求遠，要我們遵守政府的法令規定，但

段落，但不是停，現在要為未來開始來做鋪路，需要有人才有力量，你們在那裡做，應該當地人看到，我們不是為名與利，而是為了需要有人與力，人力！所以未來的長期，是人與力量，多人、多力量啊！」

「熱食也許還要再繼續，因為他們還沒有房屋不知去哪裡吃飯。尤其素食，我們提供的非素不可，要解釋給他們聽，該是把法落實，以日本現實的佛法要讓人能了解，很不簡單，我們可以從素食的道理跟他們講身體健康，大地汙染、空氣汙染，可以素食，就有很多很深奧的道理可以分享，很有科學根據去帶動。」

二月十六日，志工重返災區展開第二個階段的賑災，啟動了以工代賑，還有慈濟茶屋。即使在北國的大冷天，因為有上人的諄諄指導，我們的心是熱的，我們時時將上人的話放在心中，我們將無畏風雪往第二個化城邁進。

一月二日上人開示：

是有機會就要把握，趕快去做。地震後，感恩證嚴上人幾次對日本慈濟人感恩並慈示賑災的方向。

一月二日上人開示：

「不要那麼快（勘災），還是坐鎮，好好地聽，收集更多的資料，等待，等待真正地，交通可以通，才出去，因為地震過後，還會有很多的餘震。」

「就如這一次發生是在新曆年，一直以來都很冷，很感恩日本有這一群慈濟人，他們很快速去做熱食。此時熱食是重要，很寒冷，手上端著熱騰騰的湯食，他們最需要的：還有毛毯、衣物都是在寒冷飢餓時刻能及時付出。真的很感恩在日本的菩薩們，她們雖然都是女性，真正千手觀音，大家人力會合付出力量真的很札實。」

一月八日上人開示：

「看到了我們日本分會，菩薩們大家都是很團結，合和互協，看來我總是很安心，加上了陳居士（陳金發）那一天也很即時到了日本去，回來了他是現在在我身邊，跟大家做分享，聽來訊息都是，結構非常的凝聚。所以，真的是很感恩。」

「現在是緊急需要的時刻，能快速送達是最重要，配合政府的規矩，這我一再說，想請大家現在要合和互協的時刻，感恩，不過各位菩薩，你們若要去送溫暖、送食物，可以的話，大家要先顧好自己，禦寒的也要準備好，交通等等都要小心，這是很重要，感恩也要祝福大家，發揮愛心，那一分的彼此之間的合和，這是很重要，感恩各位菩薩。」

一月一日上人開示：

「的確你們很幸福，慈濟人不談苦，要談福，造福當地人很了不起。過去很緊急應該先告一



■ 前勘志工與陳文筆醫生（中）等人合影。攝影／盧建安

能登半島地震援助 (二)

合作共善

撰文／陳思道

日本在二〇一六年成立了一個平台「日本全國災害支援團體互動交流救災團體」，是一個救災團體互動交流的平台。慈濟日本分會在二〇一八年加入這個平台，成為正式會員之一。



■ 1 來自全國各地的醫護人員，到災區為鄉親服務，志工則用愛心滿滿的熱食為鄉親與一起在災區共善的友人服務。
攝影／陳麗分

■ 2 農家開車帶來自家栽種的蔬菜，送給煮熱食的團體使用。攝影／陳靜慧

慈濟日本分會透過多年與平台上其他日本團體互動，增進對彼此的了解。因此，當我們準備在十一月十二日進入災區煮熱食的時候，年輕的公關協調志工井田龍成立刻與平台聯繫，得知同是平台的友好團體 Rescue Stocks Yard 在穴水町的冥王星交流會館的避難所營運，曾經有合作經驗的因緣，讓他們非常安心且歡迎慈濟一起在該避難所作提供熱食。

在這個避難所，不只慈濟及這個友好團體，也有兩位分別來自埼玉縣及長野縣的廚師，一起為避難所受災鄉親煮熱食。當慈濟加入煮午餐熱食的時候，這兩位廚師就專心在煮早餐及晚餐。大家分工合作，一起陪伴受災鄉親。煮熱食期間，常會有農家透過由穴水町社會福祉協議會營運的災害對策本部，將自家栽種的蔬菜送給煮熱食的團體使用。

一月十四日，慈濟在穴水町的另一個地點穴水綜合醫院，開始展開了另一個熱食發放提供熱食。對象除了避難所的鄉親之外，還有大部分也受災的穴水綜合醫院的同仁，以及從其他縣市前來穴水町支援的醫師、護士、保健師、營養師等醫護人員。醫護人員以他們的專業到災區為鄉親服務，慈濟志工則用愛心滿滿的熱食為鄉親服務，也為這些一起在災區共善的友人服務。

在災區，不同的志工團體在碰面或擦肩而過的時候，都會有一個打招呼的默契，大家會彼此說「您辛苦了！」雖然不一定知道彼此是在哪一個地方，哪一個項目為鄉親服務，但是大家都有一個共同的目標，就是希望能夠透過各自的專長，帶給鄉親們更大的力量。每一個人、每一個團體就像是拼圖上的一小塊，拼起來才是完整的一張畫。

能登半島地震援助 (三)

撰文／許麗香

穴水町二處發放因緣

慈濟日本分會，在四年前開始參加日本的志工平台，從這裡輾轉認識的穴水町的社會福祉協議會，促成了第一個發放點，冥王星交流會館熱食發放的因緣。

冥王星交流會館

志工廚房位在交流會館的後門，用藍色塑膠布沿著牆壁搭起臨時廚房。因為是臨時搭

的棚子，志工要忍受颶風、下雨、下雪與天寒地凍。在鄉親的感恩與讚歎聲中，志工第一天（二月十三日）順利供餐。然而之後煮飯成了志工的惡夢。第二天下雪天，對不熟悉寒冷的志工，從沒有想過，會因為瓦斯桶的瓦斯凍結，飯煮不熟。一鍋鍋半生不熟的飯，讓有多年熱食賑災經驗的志工，感到非常挫敗。第三天，問題同樣出現，除了由另一熱食發放點的穴水醫院支

援之外，避難所提供了電飯鍋，讓志工在往後的梯次解決了煮飯的問題。但是到了第二梯，電飯鍋竟然故障了，緊急情況下，由當地志工團體，借我們直接用瓦斯煮飯，這對於小家庭的家庭主婦，又是另一個考驗。但是超越了困難後，大家都很开心，因為都變成煮飯高手了。

避難所的鄉親中，高齡者居多，志工很用心地考量到除了要切吋菜，還得將菜煮得爛一點，儘量提供纖維足夠的蔬菜及蛋白質豐富的豆腐料理。有位鄉親說，不知道為什麼吃了我們的

穴水綜合醫院

透過陳文筆醫師的牽引，穴水綜合醫院的島中公志院長，十三日專程來到第一個熱食發放點，問說是否也能到該醫院煮熱食，因為從地震發生到現在，醫護及避難的人員，還沒有吃過熱食，志工毫不猶豫地答應了。

在這裡領食的鄉親都比較年輕，需要力氣去工作，發放的第一天（一月十四日）都不好意思開口說要加量，因為怕不夠給後面的人，第二天開始小聲說，要加量大碗，女眾也開始鼓起勇氣輕輕地說「要大碗的」。

每一梯次約十五位志工，同時兩個發放點，是志工的這次面臨的挑戰與突破。過程中問題不斷，但是走過後，再回頭看著鄉親捧著熱飯舒緩的臉龐，一切都值得。



■ 1 在冥王星交流會館發放熱食。攝影／慈涓

■ 2. 穴水綜合醫院島中公志院長（左）帶著陳文筆醫生（左二）與志工們前往醫院廚房場勘，確保隔天能煮熱食。攝影／鍾佳玲



■ 鄉親很歡喜接受福慧紅包。攝影 / 李月鳳

2024 祈福感恩會

一年一度的「祈福感恩會」年年的期待，是人人善念共聚，更期待能幫助能登災區鄉親早日恢復如常。

撰文 / 人文真善美



能登半島地震援助（四）

中能登町古民宅因緣

◎ 撰文 / 許麗香 陳靜慧

慈濟志工自一月十三日起連續十七天，在重災區的穴水町二個地方提供熱食。能快速進入災區支援的關鍵之一，是找到了有水有電的住宿地，是位於能登半島入口位置的中能登町的「古民家御祖之里」，這來自一段不可思議的因緣。



■「古民家御祖之里」(みおやの里)外觀。攝影 / 周利貞

慈濟志工自一月十三日起連續十七天，在重災區的穴水町二個地方提供熱食。能快速進入災區支援的關鍵之一，是找到了有水有電的住宿地，是位於能登半島入口位置的中能登町的「古民家御祖之里」，這來自一段不可思議的因緣。

醫師會餐聚 不可思議因緣

二年前一場在大阪的醫師聚會，關西協力組長陳靜慧因任外交官的先生關係，出席了這場

活動，在會中把握短短的時間分享了「慈濟」。陳文筆醫師夫婦來自石川縣，那天因為還有其他事的因緣，順便參加了這日的餐會。

一月五日，慈濟志工即將前往勘災，陳靜慧想起了這位陳醫師，拿起名片仔細一看，他所任職的七尾醫院也是受災區。聯絡上陳醫師後，志工前往拜訪，他也陪同志工深入重災區。

十日晚上慈濟已確定將要前往災區提供熱食，仍為尋不得住宿處而緊張。陳醫師得知後，立即電話打電話給與臺灣基隆市有長年交流的町長宮下幸夫，不到十分鐘得到町長允諾將為志工安排住宿。隔天，得知是一棟古色古香，具有一百多年歷史的「古民家御祖之里」(みおやの里)。

古民家是家 也是切菜工廠

有水有電的古民宅，成了志工在災區的家。每晚，志工在

這裡為了隔日五百多人份的熱食，洗菜切菜，也裝滿水袋，隔天帶到斷水中的穴水町。每晚的切菜聲，響亮在古民宅，每日清晨六點，志工們從這裡摸黑出發，前進災區。

晚上回到「家」，簡單用餐後，八點半的賑災會議，大家一面削牛蒡、切馬鈴薯、手撕高麗菜，一面開會，也分享當天的溫馨點滴，還有緊張的滋味，常常笑聲不斷，消解了一天的疲憊。

在當地行醫二十多年的陳醫師溫文謙卑，本身也擔任石川臺灣交流促進協會理事長，地震發生後募集各方物資，載著物資進入災區三十一趟，他常常說這是「善的循環」。宮下町長擔心志工只有自備的睡袋太冷，第二天請職員送來了保暖墊與毛毯，讓志工夜裡可以保溫，他也感恩志工為災區帶來力量。

志工以熱食溫暖鄉親，志工背後也有溫暖的力量。關鍵時刻，感恩有貴人助手推舟，處處貼心，一路與志工同行！



第一場：日本分會外部場次
二〇二四年一月一日，能登半島發生7.6級的大地震。志工們遠赴災區，進行四個梯次的熱食發放。東京地區的歲末祝福是否能如期舉行，一直是個未知數。最後拍板決定一月二十八日的外部場如期舉行，此時距離活動只剩十天。

活動流程與內容因部分人力前往能登賑災而一改再改，直到當天早上，才確定了所有流程及人員，如期圓滿完成這場法會活動組特別準備了祈福卡，讓與會會眾書寫，並將寫好的祈福卡掛在祈願樹上，願所念之人安樂、所想之事順意。

平安鐘 敲醒當下的善心

在布置組志工的巧手下，每處準備了蘋果、橘子，象徵「平安」、「吉祥」。會場也佈置了平安鐘，讓有心人敲響當下的善念慈心。點亮福慧燈，祝福新

的一年裡，多福多慧。

台北駐日經濟文化代表處張瑞麟顧問蒞臨參加，張顧問表示，雖是第一次來，但一進門，就被道場的氛圍及志工們的親切熱情感動，心也靜了下來。

Take 智美協助慈濟全球大藏經的日文配音，她分享：「志工付出的身影及充滿大愛的精神，原來慈濟人可以把生命活得這麼美！我真的非常感動，眼淚一直流出來！到現在我的眼淚還是不聽使喚。」從一月十三日開始，日本慈濟志工人梯前往災區煮熱食。東京、大阪、東北的志工也展開街頭募款。在新歲之際，大家一同虔誠祈願，天下無災人皆平安。

第二場：中文班祈福感恩會

「愛是看不見的語言，愛是摸不到的感覺，愛是我們小小的心願，希望你平安快樂永遠……」二〇二四年二月四日，這天是一年一度特別為人文教室孩子籌備

的迷你版祈福感恩會。慈濟日本分會三樓佛堂裡，人文教室的家長與孩子們在陳玲韻老師的帶動下，專注地練習手語歌《讓愛傳出去》，氣氛溫暖，充滿了愛與關懷，即使窗外是攝氏五度的陰雨天，也讓人絲毫不覺得寒冷。

植善念 見苦知福布善種

日本分會祈福感恩會的人文教室場次，更結合了靜思語的教學和竹筒回娘家的捐款活動，希望讓孩子們也有機會成為一個個將愛傳播出去的善心種子。

活動中，孩子們透過畫面看到元旦當天發生在能登半島的強震所帶來的災情，每個人的臉上都寫滿了擔憂。中級班學生張皓貽說：「看到災民們過著這麼不方便的生活，我覺得自己實在是太幸福了。」

祈福感恩會的尾聲，大家一起為災民祈福，然後將手中的竹筒打開，把大家的愛心存款匯集在一起，匯聚成一股力量，希

心繫街友冬令送暖

撰文／陳雅琴・慈涓・黃韻璇



■ 帶著食物與禦寒物資，為露宿通道的街友們送上溫暖。攝影／慈涓

十二月的日本關東地區天氣寒冷，志工們擔心街友受凍，每年都安排冬令物資與熱食發放。今年的冬令發放在東京都的代代木公園、埼玉縣川口市、以及神奈川縣的壽町公園進行，照顧暗角弱勢族群的同時，也接引社區生力軍加入大愛行列。

代代木公園
新一代年輕志工的傳承

東京都代代木公園的熱食發放已邁入第十四個年頭，是日本志工長期耕耘的福田。今年分別於十一月二十八日及十二月四日進行兩次熱食及冬令物資發放。發放前如常帶領大眾「祈禱」，凝聚善念為天下祝福。街友們在志工的潛移默化下，也學習做手向下的人。從一開始只有一、兩位街友會協助搬運器具及收拾回收物品，到現在有十幾位街友幫忙，搶著為大家服務。響應竹筒歲月的人也增加了，街友們以少許金錢或勞力幫忙清理場地，雖是微薄的力量，但就像燭光照亮自己也照亮別人。

加第四次發放，看到慈濟志工們為了讓發放流程更順暢，每回都做細節的修正，他很感恩有機會參與並學習。志工真誠知禮是位大廚，一早就於廚房完成熱食後，便換上志工背心一起前往現場。人文教室林佳蓉老師第一次參加發放，看似簡單的盛白飯，但面對比預期人數還要多出的街友等待領餐，要如何平均分配白飯，考驗林佳蓉隨機應變的能力。社區菩薩有了付出的機會，善的種子也開始萌芽茁壯。

夜訪川口車站發放
為年長街友們送上溫暖

川口車站位於東京近郊埼玉縣，距離都心車程約三十分鐘，社區的志工從二〇一〇年開始，就為露宿在車站附近十來位街友，進行每月兩次的夜間關懷。

十二月八日志工一行六人，帶著食物與禦寒物資，為街友們送上溫暖。一進入地下通道，街

友們似見到熟人般，向志工微笑打招呼。一位街友激動的向志工傾訴，前兩天他的禦寒物資全部被偷走，正愁著不知如何過冬，今天就碰上志工們來發物資，真的太感恩了！志工們也很欣慰地能成為他的及時雨。

志工們帶著物資到附近尋找是否有遺漏的街友，最後在公園深處發現六十三歲的佐藤先生。志工們熱誠地送上飯糰與麵包，並贈與禦寒物資。佐藤先生因工作受傷而無法繼續打工，生活拮据，肚子餓就拿店家的免費糖果，或是喝公園裡的水裹腹。今天的物資是他一個半月以來的第三次正餐，他感恩志工們陪他聊天，因為已經好幾天沒跟人說話了。

神奈川縣壽公園地區

一期一會的「祈禱」善緣相續

關東地區主要街友聚集地之一的壽公園，居民中大約半數是

殘障者，且平均年齡在六十五歲以上。這裏被稱為「福祉的街道」，附近多為領政府撫卹金過活的低收入戶。日本分會十年前曾在這裡辦過一次冬令發放，社區志工發現街友們有需要，與壽公園管理單位的相關負責人聯繫後，決定於十二月九日舉辦冬令發放。

發放的物資豐富，

有大家齊心製作的一百五十份便當和襪子、禦寒衣物、暖暖包等，還有熱麥茶以及寶特瓶回收製造的毛毯。發放前，志工們以虔誠的心帶領街友們唱誦日文版〈祈禱〉，讓他們也能付出善念、為他人祈福。一位街友跟志工說，他沒看過像慈濟一樣的志工團體，「祈禱」後心靈也被療癒了。一位街友奶奶拿到日文靜思



■ 1. 壽町公園發放開始，街友們依序排隊領取便當。攝影／慈涓

■ 2. 代代木熱食發放，志工長野輝（右）從付出中學習感恩。攝影／黃韻璇

給對方。

今年關東地區冬令發放共動員志工近一百人次，受益的街友共計三百四十人。志工隊伍中，有跟著媽媽來發放的慈四代高中生江紘毅，還有第一次參加的上班族梅田美里。善因的種子一日種下，總有一天會茁壯。





■ 帶著食物與禦寒物資，為露宿通道的街友們送上溫暖。攝影 / 吳孟儒

臘月寒冬溫暖味 歲末圍爐道感恩

撰文 / 陳雅琴

慈濟的冬令發放及慈善圍爐，是希望讓大家在寒冬中不僅身暖心也暖。

「圍爐」就如同日本「大晦日」，是除夕的家人團聚日。

今年日本分會首次舉辦，邀請大愛食堂、新芽助學生、關懷戶回家，一起「圍爐」，一起話家常。

志工陳思道說起緣由：「（證嚴）上人在開始做慈善之後，視所有案家為家人，即使借米借油，自己不夠溫飽，還是要備餐邀請案家，每年一起歲末圍爐過年。」

合和互協力量大

日本分會過去從未曾與慈善案家一起圍爐。雖然在幾年前就開始有此構想，但是碰到新冠疫情蔓延而未能圓滿。慈濟是全球最大的家庭，應該邀請更多的家人回家，享受家的溫暖。

圍爐的前置作業工作繁瑣，人員的邀約、香積、布置、志工們的分組等等，在在都是挑戰。要在有效的空間裏，規劃桌子的擺設、桌上的擺盤，讓彼此之間有點距離，又不會太遠，思考如何才能容納更多人。香積也是具挑戰性的任務，除了菜單外，人數的變化也考驗著採買智慧。

歡樂食輪轉法輪

「圍爐」就如同日本「大晦日」，是除夕的家人團聚日。原本大家擔心剩餘食物太多，結果是一次又一次的補給，香積志工們樂開懷。餐敘娛樂是抽籤拿結緣品，遊戲內容是自我介紹及新



■ 1. 日籍志工梅田沙織（右一）歡喜付出。攝影 / 慈涓

■ 2. 志工們的陪伴，讓邵良運（前一）覺得就像一家人一樣倍覺溫暖。攝影 / 慈涓

我。當參加志工活動的次數多了，大家也记住了她，彼此間有更多的互動，也就越做越開心了。

町田設計及建築專門學校的學事部次長館池啓孝說：「今天新芽的同學全員出席，在歲末年終之際，很高興可以表達感恩之情。明年即將迎接新生，期待未來能和在校生一起攜手，與慈濟保持更深度的互動及交流。」

長情大愛愛滿盈

本是廚師的邵良運，在一次酒後失足而不良於行，昏迷三個月。住院期間因醫院的中國籍職員調走了，無人翻譯語言不通。透過醫院的醫生介紹，打電話給慈濟，因而與慈濟認識。從二〇一六年開始至今，志工的陪伴未曾間斷，經過長期復健逐漸進步。邵太太表示很感謝慈濟這幾年來的幫助，若沒有慈濟，真的不知怎麼辦。志工們的陪伴，讓他覺得就如同家人一樣，他的夢想就是加緊鍛鍊早日康復，能

自己動手下廚做飯給大家吃。執行長許麗香說：「圍爐」是從精舍、上人的理念延伸過來，所以想把這份慈濟大家庭歲末圍爐的溫暖帶到日本。雖然以前也舉辦過圍爐，但這次希望能一掃疫情帶來的陰霾，所以邀請大愛食堂、新芽同學、關懷戶回家。未來期許「慈善」能深耕，而不是像浮萍一樣。不只把愛傳出去，而是要做得更深、給更多的愛。」

許麗香表示，在邀約時原本擔心大家心中或有顧慮，但今天看到大家從頭笑到尾，也吃到尾。歡愉的氣氛裡，有位九十四歲高齡長者，她期待以後的人生，每年都可以來參加。雖然不知道還有多久，但這也是她對自己生命的另一種期待。

一行人比鄰而坐，一起等水開，期待和幸福也漸漸地滿溢出來。簡單的食材隨手可以獲得；心中的大愛，也是隨時都可以付出。簡單的日子裡，往往有最值得牽掛與回味的人間溫暖味。

年新希望，或是最想說的話，整場洋溢歡樂，氣氛溫馨感人。前來參加的鈴木一也分享，火鍋裏有好多東西都是第一次吃到的，尤其喜歡芋頭和炒飯。他已經領了兩年的大愛食堂便當，便當很美味而且對他非常有幫助。今天的活動氛圍令他充滿幸福。他將努力讓明年過得比今年好，健康地度過未來的一年。新芽助學生北村矢同學表示：「今天的料理美味又很溫暖，更高興的是還能夠在吃飯中可以

和這麼多人聊天。」這一來，他數次參加志工活動，在與人接觸談話的過程中，改變了思考方式，想付諸行動做好事。因為做志工，讓他感到很幸福；以前總只是想到自己，很難去為別人做任何事情。很高興能夠接觸到慈濟，成為志工，並可以為別人做一些事情。」永井楓花同學分享：「剛來的時候什麼都不懂。第一次和臺灣人接觸語言不通有點害怕，但大家就像對待家人一樣歡迎

日本分會二〇二三年を振り返る

訳／邵世軒 文／張秀民 黃韻璇

二〇二三年は本当に不思議な一年でした。日本分會の小さな法船は、みな的心を一つにし、仏法を広め、そして利益衆生の彼岸へと進みました。

大愛食堂は幸せの味

ここ二年間「大愛食堂」は月二回開催されています。献立作りから買い出し、調理までを八組のボランティアが協力し合いながら順番に回しています。ベジタリアンを推進するのみならず、地域社会に広く深く溶け込み、助けを必要とする人々に真心と温もりを届けています。

慈しみを届け 地域に人間菩薩集まる

二〇二三年、日本分會は十一月末から四つの地域：東京代々木公園、埼玉県川口市、神奈川県寿町公園、そして大阪西成区にて温かい食べ物や冬用物資の配給を開始しました。それぞれの地域における日陰の社会的弱者のケアだけでなく、そこで更に多くの新しいボランティア仲

の慈善文化展を開催し、より多くの人々に慈済宗の「人間仏教」の意義を理解して頂く機会になっています。展示のハイライトは「利益衆生」エリアで、ネパールでの「中退ゼロ計画」と多くの人々の慈善活動を展示しています。

人文知探訪 来日講座交流

慈済科技大学、台南慈済小学校、アラルンプール慈済国際中学校などが日本を訪問した際には、学校や団体における慈済の人文活動をどのように実践しているかを紹介し、日本分會が推進する事業の取り組みと成果を共有しました。学生達は日本分會で一日ボランティアを体験し、視野を広げ、苦を知り幸を感じ、生命教育の一ページを刻みました。

異國慈青 淨山や夜訪

日本の慈青は、様々な国籍や母国語を持つ若者達の集まりです。新型コロナウィルスの影響で一時中断した都庁近辺の路上生活者夜間訪問も先輩ボランティア達の実力で再開され、社会貢献の新しい力になるように励んでいます。

間も大愛の輪に加える事ができました。

まるで家族のような ボランティア達

日本分會では毎年緊急的なケースを引き受ける事が多く、それらを通して他人の人生に立ち会い、学ぶ事もいろいろあります。関西のボランティアは、陳さんが日本在住病気の母親と継父の人生の最後の道のりを共に歩むケースをサポートしました。「苦集」の現れは、愛だけが苦しみを埋める事を見せてくれました。

息子を案じる母親が海外から電話をして来たケースもありました。慈済ボランティアに息子を緊急に探してもらえないだろうかという件でした。無事に家に戻った息子は涙を流しながら母親に、「慈済の人達がまるで母親のように親身に世話をしてくれた事にとても感謝している。自分も慈済ボランティアのように他人を助けたい」と話したそうです。任務は無事に完了したとしても、その過程は波乱万丈です。常にボランティアは知恵

みなで力を合わせたバザー

東京のボランティアは毎年「ベジ粽を包んで愛を伝える」イベントを開催しており、二〇二三年度は約一万个のベジ粽を販売しました。関西のボランティアも、粽の葉や干し大根に、ベジタリアンオイスターソースなど、日本では手に入りにくい材料を使って千五百個以上のベジ粽を自家製作し販売しました。一つ一つの粽は、小さな愛情を集め大きな愛へと繋がっています。また、東京中華学校のボランティア達もチャリティーバザーで力を合わせ、さらには、静思書軒、人文教室の児童中国語クラス、社会推進教育なども共に力を尽くしました。新型コロナウィルスの影響で三年間開催されなかった大阪の春節祭りがついに復活し、関西のボランティアは長年にわたり、会場の環境清潔作業を支援しています。

親睦の茶会 海外にも慈済心

群馬地区は東京の日本分會から車で約二時間の場所にありますが、八月末には經典の演繹練習と交流の茶会が開かれ、七月末には名古屋で同郷人の茶会が開催

を駆使したり、その力量が試されます。

塀の中の人々のケア 人生の恩人

ボランティア達は慈済の月刊誌や手紙を通じて、長期間にわたり受刑者達のそばに寄り添い、支え続けています。こうした一つずつのケアが他の受刑者に慈済を紹介する人を生み、毎月新しいご縁やサポートが繋がっています。

愛は求めずただ与える事

経済的に豊かな日本にも見過ごされがちな暗い側面があります。そうした中で、日本分會は「新芽助学金」を設立し、二〇一七年から二〇二三年にかけて延べ六十九人の学生達に援助をしました。子ども達に手を差し伸べ、真心を込めた交流や愛情を通じて、愛の種を蒔いています。

仏陀に出会い 清淨の自分を見つけ出す

五月の釈迦誕生日には、「礼賛と感謝」

されました。海外で再び慈済に会い、華人の故郷からきた愛が菩提の種となり、その土地で芽を出し、地元を利をもたらし事を期待しています。

安住の願い 広く清らかな仏の国を

「無量義法髓頌」の經典の演出は、十月に台北アリーナで三日間にわたり上演され、唱え、手話、ミュージカルを通じて經典を解釈し、慈済の人間菩薩と仏陀の教えを密接に結び付けました。日本分會は第六回目の演目に参加し、このグローバルな靈山大法会にオンラインでつながりました。

二〇二四年、證嚴上人からの祝福は「仏法を広め、利益衆生、信念を持つて行動する事。ベジタリアンと共に善を行い、大地を守る」というものでした。皆さんに完全な大愛を持ち、ベジタリアンを行い、生命を殺さずに生命を大切にすることを教えています。私達は皆、小さな星々ですが、個々が集まれば輝かしい星河を形成します。善と愛で世界を照らし、慈済の菩薩道に心を込めて歩みましょう。

能登半島地震支援の記録

能登半島



◎ 炊き出し

1/13 ~ 1/29 まで
延べ 7129 食

◎ ボランティア動員

1/13 ~ 1/29 まで
延べ 372 人◎ 「厚手エコ毛布」、
マフラー、ショール
計 204 セット

2024/1/29 までの集計

◎ 20240113 初日、穴水町の「さわやか交流館ブルート」で温かい食事を提供。公立穴水総合病院の島中公志院長が訪問し、慈済が公立穴水総合病院や他の避難所でも温かい食事を提供してはどうかと提案。ボランティアは、病院を視察した後、翌日に二箇所（「さわやか交流館ブルート」と公立穴水総合病院）で食事提供できるよう、2つのグループに分けることを決定。

◎ 20240114 公立穴水総合病院と「さわやか交流館ブルート」で温かい食事を提供。

◎ 20240121 慈済日本分會は、新大久保駅、大久保駅、新宿駅西口で「能登被災地支援」の街頭募金活動を行う。

◎ 20240128 NHK のニュース番組「おはよう日本」が、穴水総合病院をライブで、慈済ボランティアによる温かい食べ物の提供取材。テレビ朝日ニュース報道 (ANNnews) が「さわやか交流館ブルート」を訪問し、食事の提供をライブで紹介。ANNnews <https://www.youtube.com/watch?v=CUHrXUOU648>

◎ 20240128 大阪のボランティア 7 人が、大阪天王寺駅で募金活動を行います。1 月 31 日、ボランティア 5 人が、難波高島屋デパート前で募金活動を行いました。

◎ 20240129 公立穴水総合病院の食事提供が終了し、第一弾「能登半島地震災害支援団」の任務が無事完了。ボランティアは、穴水町の吉村光輝町長と中能登町の宮下為幸町長を訪問し、宿泊施設の提供に感謝し、活動成果を報告する。

◎ 20240112 第一弾「能登半島災害支援団」は、4 回の出張で延べ 372 人のボランティアが参加し、合計 7,129 食の温かい食事を提供。

◎ 20240101 能登半島でマグニチュード 7.6 の大地震が発生し、大きな災害を引き起こした。證嚴上人は、最初の段階で、ボランティアと会員に電話で会話し、皆の心を落ち着かせた。

◎ 20240102 上人は台湾での巡礼に忙しい中、毎日オンラインで災害救助を指導。

◎ -0108

◎ 20240104 JVOAD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）とオンライン会議を行い被災地の状況を把握。

◎ 20240105 1 月 5 日、陳金發、陳思道、盧建安、池田浩一の 4 人が七尾市と穴水町の被災地を視察し、大阪の慈済委員から紹介された七尾病院の診療部長である陳文筆医師に面会し、現状を把握。

◎ 20240106 陳文筆医師の紹介を通じて、陳夫人の案内で、公立穴水総合病院の島中公志院長、中橋毅副院長、小林建史事務局長を訪問し、現地の被災状況を理解。

◎ 20240111 慈済ボランティア陳思道と井田龍成が、暖かい食事を提供するための詳細を決定するため先に穴水町に入る。

◎ 20240111 陳文筆医師の紹介で、中能登町の宮下為幸町長は、百年文化財の古民家「みおやの里」を慈済人の寮として無料で提供を決定。

◎ 20240112 慈済のボランティアは、穴水町「さわやか交流館ブルート」に JVOAD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）の浦野愛さんと穴水町社会福祉協議会の橋本美鈴さんを訪問。また、避難所でボランティアの石河直さん（パン屋を経営）と川島徹さん（イタリアンレストランを経営）の面談翌日の避難所での温かい食事提供の段取りなどを打ち合わせる。

◎ 20240112 第一弾「能登半島災害支援団」14 人（東京 9 人、大阪 5 人）が、温かい食事を提供のため能登半島に向けて出発。

◎ 20240112 陳文筆医師が、慈済ボランティア 9 人と、中能登町の宮下町長を訪問。中能登町の職員がボランティアを慈済ボランティアが無償で宿泊する古民家「みおやの里」へと案内。

能登半島地震支援（一）

因縁と上人開示

◎ 訳／王譽葵 文／許麗香



■ 證嚴上人はインターネット経由でボランティアと支援会議を。写真／慈涓

地震が発生、東京在住の慈濟の皆さんも揺れを感じ、テレビでは津波警報が流れ、心が落ち着かなかった。とその時、電話がかかり、証嚴上人からだった。日本にいる皆さんの安否を、慈愛に溢れる声で訊ねた。

令和六年、誰もが平穏を願う元日、一月一日午後四時十分ごろに、石川県能登地方を震源とするマグニーチユード（M7.6、深さ約十キロの規模を示す地震が発生し、世界各国に報じられた。元々お正月で、人々は神社やお寺に初詣に行き、ご家族に会いに帰省する等、和気藹々な光景が見られるはずだった。しかし、時が来て、天地が揺れ続けた。

災害の事前調査と支援活動の開始

日本海に近い風光明媚な能登半島は、海産物や漆塗りで有名だったが、東京慈濟の皆さんにとっては馴染みの薄い場所。一月五日、北陸新幹線の正常運行を確認し、台湾から支援に入った陳金発は、陳思道、呂建安、池田浩一とともに被災地へ向かった。七尾病院でメンバーは石川県台湾振興会の陳文筆会長

と陳夫人に付き添い、穴水町に入った。現地で、道路は寸断され、政府は早急に復旧させようとしており、物凄い勢いで車も走っていた。十一日に渉外チームは再び被災地に赴き、現地の方と炊き出し場所確保の相談を経て、翌日に炊き出しチームが出動した。

今回の支援に向けて、私たちが出来るだけ早く活動始められたのは、沢山の方々のお力添えと、団体として長年の炊き出し経験があるからだ。それに、何よりも被災された方々の無力さや苦しみを自分のように感じ、なんとしても栄養のある温かいものをつてほしいという上人の思いと支えがあるからだった。支援報道に関して、NHKと朝日をはじめ、北陸、北国、産経新聞等のメディア関係者は、私たちに問いかけた。台湾発祥のボランティア団体はなぜここに来たのか。純粋にそ

うしなければと思う一心だけだった。と、私たちは答えた。

現地に向かう炊き出しチームの出発とともに、被災地に行けずに残ったメンバーも、宮城、東京、群馬、大阪で街中募金活動を行った。

炊き出しの第二段階

炊き出しの第一段階は、一月十二日から二十九日まで続いた。能登半島で炊き出しの六日目、日本海から東に昇る真っ赤な太陽を見られ、とても貴重な美しい光景だった。途中で、上人から何度も「遠回りしないように」「政府の法令も遵守しよう」「一刻も早く支援の機会を掴もう」と念を押して下さったことを思い出した。地震後に、上人は何度も日本の慈濟の人々に感謝の気持ちを伝え、災害救援の方向を示してくださった。

一月二日、上人は次のように教えを伝えて下った

「地震被害の調査をそんなに急いではいけない。やはり自身も心を落ち着かせること。人々の話を丁寧に、心を込めて聞くこと。もっと情報を集めて機会に巡り合うことを待つこと。地震の後、まだ余震が続くかもしれないから、交通が落ち着くまで待機し、それから支援活動に向かうこと。」

一月三日、上人は次のように教えを伝えて下った

「今頃はとても寒く、日本に慈濟の皆さんがいて、温かい食べ物やスープをすぐに作り、提供していることに感謝しています。この時期、とても寒いですから、温かいスープを手にするのは、現地の皆さんにとってきつと最も必要なことです。また、毛布や衣類も、寒さと飢えの時に瞬



■ 食材の下ごしらえ。写真／周利貞



■ 和倉温泉地区では、家屋の倒壊が深刻だった。写真／濟一



能登半島地震支援（二） みんなで協力

◎ 訳 / 岩村益典 文 / 思道

この避難所では、慈済と RSY だけでなく、埼玉県と長野県から来た二人のシェフもいっしょに被災者のために温かい食事を提供してくれました。

二〇一六年、日本で「全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（NVOAD）」を設立されました。これは救済団体が互いに交流を深めるためのネットワークです。慈済日本分會は二〇一八年にこのネットワークに参加し、正式なメンバーとなりました。

慈済日本分會は、長年にわたり NVOAD に加盟している他の団体と交流し、互いの理解を深めてきました。一月十二日に



時に提供され、日本の皆さんには本当に感謝しています。メンバーは女性ばかりですが、まさに千手観音様のように、人の力を合わせて、また人の力になる。本当に頼もしい限りです。」

一月八日、上人は次のように教えを伝えて下った

「私たち日本支部は、菩薩のような、メンバーの皆さんが心を合わせ、団結し、助け合い、私は常に安心しています。本当に感謝しています。」

「今は緊急な時期で、物資や食事を迅速に届けられる事も、政府のルールに協力する事も重要であり、それは何度も伝えてきました。皆さんにお願いした

■ 1 被災した現地の方々が食事の準備をする。写真 / 陳文絲

■ 2 穴水総合病院の一室で、慈済茶屋という現地の皆さんの声をきく場を設けた。写真 / 陳文絲

いのは、心を合わせて、お互いを助け合う事である。また、台湾からのメンバー陳金堯さんも今は私の側にいて、現地で見た状況を伝えてくれた。本当にありがとうございます。現地に行くなれば、支援活動中は、自分の身を大切に、体調にもお気をつけて下さい。皆さんが心を合わせて支援している事に意味があります。」

二月一日、上人は次のように教えを伝えて下った

「メンバーの皆さんは凄く幸せですね。慈済では決して大変と言わず、それを祝福として受けとめる。緊急事態の中、様々な活動がある中で、それを停止するのではなく、同時に将来の為に歩む道を開拓し、その為には人材も、力も必要になる。メンバーの皆さんは現地向かい、皆さんと知り合い、繋がりを持つ。私達は名誉や利益のた

災害地域で温かい食事を準備する際、広報調整ボランティアの井田龍は、この日に連絡を取り、メンバー団体レスキューストックヤード（RSC）が穴水町さわやか交流館ブルーに避難所を運営していることを知りました。以前に彼らと協力した経験があり、慈済がその避難所で温かい食事を提供するのを歓迎してくれました。

慈済が昼食を担当すると、これら二人のシェフは朝食と夕食に専念しました。みんなで協力して、被災者を支えています。食事の準備中、穴水町社会福祉協議会が運営する災害対策本部を通じて、地元の農家が自家製の野菜を提供してくれました。

一月十四日、慈済は、穴水町の別の場所である穴水総合病院で、温かい食事の提供を開始しました。対象は、避難所の住人だけでなく、大部分が被災した穴水総合病院のスタッフや、他の県や市から穴水町に支援に来

めではなく、人のため存在しています。だから、長い目で見れば人と力は凄く大切です。人が多ければ、力も強くなる。」

「現地の皆さんのこれからがまだ不安定な中、炊き出しはこれからも続けて行きます。そして、何よりも、菜食の食事をすすめ、仏法の教えをも皆さんに伝えてください。菜食は、体の健康と、地球温暖化の対策にも繋がります。現に発表されている研究結果などを元に、伝えて下さい。」

二月二十六日に、ボランティアの皆さんは第二段階の炊き出しをはじめ、労働面の金銭的支援、慈済茶屋という現地の皆さんの声をきく場を設けた。たとえば、寒い北陸地方でも、上人の丁寧な教えと、私達の温かい気持ちがあれば、まだ引き続き次の化城に向かう事ができる。

た医師、看護師、保健師、栄養士などの医療スタッフも含まれます。医療スタッフは専門知識で被災地の人々に奉仕し、慈済のボランティアは愛情たっぷりの温かい食事を提供して、被災地の人々だけでなく、一緒に被災地で善行を行う友人たちにも奉仕しました。

被災地は、さまざまなボランティア団体が出会ったり、すれ違ったりしますが、皆が互いに「お疲れ様です」と挨拶します。それぞれがどの地域で、どのプロジェクトで地元の人々に奉仕しているのかは、知らないかもしれませんが、皆が一つの共通の目標を持っています。それは、皆が自分の専門知識を通じて、地元の人々により大きな力を与えることです。各人、各団体はパズルの一つ一つの小さなピースのようであり、それらが合わさって初めて完全な一枚の絵が完成するのです。

能登半島地震支援（三）

穴水町ニカ所に炊き出しの因縁

◎ 訳 / 岩村益典 文 / 許麗香



■ 1 穴水総合病院で暖かい食事を提供。
写真 / 陳麗分

■ 2 気温が零度以下がり、穴総合病院のガスボンベも凍り、ボランティア達が毛布を巻き温めようとしている。写真 / 高峻岳



言いましたが、これはベジタリアン食の力なのでしょう。

穴水総合病院

陳文筆医師の紹介で、穴水総合病院の島中公志院長が、十三日にブルートに訪れ、地震が発生してから今まで、医療スタッフも被災者も温かい食事を食べたい事がないで、病院でも温かい食事を提供できないかどうか尋ねました。ボランティアはすぐに承諾しました。

初日（十四日）被災者は、料理が足りなくなるのを恐れて、追加をためらっていました。二日目からは、大盛りを要求する声が聞こえ始め、女性達も「大盛りお願いします！」と言い始めました。

各グループは約十五人のボランティアで構成され、同時にニカ所で配布しました。問題は次々と浮上しましたが、温かい食事を手にする被災者のほっとする顔を見て、全てが報われま

慈濟日本分會は、四年前から日本でのボランティアプラットフォームに参加する中で知り合った穴水町社会福祉協議会を介して、穴水町さわやか交流館ブルートで、最初の暖かい食事を提供しました。

さわやか交流館ブルート

交流館の裏口、青いプラスチックシートで壁沿いに仮設キッチンが設けられました。これは仮設テントなので、ボランティアたちは風、雨、雪、寒さを耐えなければなりません。地

元の人々からの感謝と賞賛を受けながら、ボランティア達は初日（一月十三日）に食事を無事に提供しました。しかし、その後、ご飯を炊く事がボランティア達の悪夢となったのです。二日目は雪で、ガスボンベのガスが凍結してご飯が炊けなくなっただのです。一鍋ごとに半熟のご飯が出来上がり、炊き出し経験を持つボランティア達は、大きな挫折感を味わいました。三日目も同じ問題が発生し、穴水病院からの支援と避難所から提供された電子レンジを使って、ご飯を炊く問題を解決しました。

しかし、電子レンジが故障し、地元のボランティア団体からガス炊飯器を借りました。しかし、この試練を乗り越え、皆炊飯の達人になりました。避難所の被災者は、高齢者が多く、ボランティアは心を込めて食事を提供しました。野菜は細かく切り、柔らかく調理するようにしました。十分な食物繊維を提供するために多くの野菜を提供し、豊富なタンパク質を提供するために豆腐料理も提供しました。ある被災者は「なぜかわからないけど、温かい食事を食べたなら口内炎が治った」と

能登半島地震支援（四）

中能登町古民家の縁

不思議な因縁で、中能登町町長の宮下幸夫さんが古民家「みおやの里」をボランティアに宿泊場所として提供しました。

◎ 訳 / 岩村益典 文 / 許麗香

慈濟ボランティアは、一月十三日から連続で十七日間、被災地である穴水町の二箇所で温かい食事を提供しました。このような災害地域への迅速な支援が可能だったのは、水と電気が利用できる宿泊地が見つかったことです。そこは能登半島の入口にある中能登町の古民家「みおやの里」で、これには信じられないような巡り合わせがありました。

医師の食事会と不思議な縁

一月五日、慈濟ボランティアは災害状況を見るため出発する際、関西協力チームの陳靜慧は、以前医師の食事会で知り合った陳文筆医師を思い出しました。名刺を見ると、陳医師が勤務している七尾病院も被災地でした。そこで、ボランティアは陳医師を訪ね、一緒に被災地に入っていくま

水と電気がある古民家で、毎晩ボランティア達は次の日の五百人以上の暖かい食事をつくらうと、野菜を洗い、切り、水袋に水を入れて、午前六時、暗い中をボランティア災害地に向かいました。夜に「家」に帰り、簡単な食事の後、八時半から料理の下ごしらえをしながら、反省会をしました。笑い声が絶えず、一日の疲れが消えていきました。

十日の夜、慈濟は災害地域で温かい料理提供しようと決めていましたが、宿泊する場所が見つからずに困っていました。それを知った陳医師は、町長の宮下幸夫さんに相談し、ボランティアに宿泊場所を提供するとの回答を得ました。それが百年以上の歴史を持つ古民家「みおやの里」でした。

古民家の家が料理工場

地元で二十年以上医師として活動している陳医師は、地震が発生した後、各方面から物資を募り、二十一回もの物資を運び入れました。「善の循環だ」と陳医師は言います。また、宮下町長は、ボランティアが自分の寝袋だけでは寒すぎるのではないかと心配し、保温マットと毛布を差し入れてくださいました。それは、ボランティア自身に温かい力となったのです。

時地



■ 古民家で料理の下ごしらえをしているボランティアたち。
写真 / 周利貞

2024

三場の祈福感恩会 弘法利生の信願行

毎年恒例の「祈福感謝会」、
本年は、人々の善意が集ま
ること、そして被災地の皆
さんが一日も早く日常を取
り戻すことを祈りました。

訳 / 岩村益典 文 / 人文真善美



■ 現地の方に祈福感恩会の「福慧紅包」を手渡します。写真 / 李月鳳

第一場：日本分會外部会場

二〇二四年一月一日、能登半島で震度7.6の大地震が発生しました。ボランティアたちは被災地に向かい、温かい食事の提供を四回行いました。そのため東京地域の歳末行事が予定通り行われるかどうか、ずっと未定でした。最終的に一月二十八日の外部行事は予定通り開催することが決定されましたが、その時点で行事まで残すところ十日でした。

行事の流れと内容は、一部のスタッフが能登での救援活動に参加するため何度変更され、当日の朝までかかって、すべての流れとスタッフが決まり、予定通りにこの法要行事を無事に終えることができました。

活動グループは、祈りのカードを準備し、参加者に祈りを書いてもらい、カードを祈りの木に掛けます。そうすることで、参加者が思い浮かべた人々が幸せで、願った事がスムーズに進むよう願うのです。

平安の鐘が善の心と呼び覚ます

ボランティアにより、会場に「平安」を象徴するリンゴと「吉祥」を象徴するオレンジが用意されました。そして「平安」を象徴する鐘も設置され、この鐘を鳴らすことで善意と慈悲を響かせることもできます。福と

知恵の灯を灯し、新しい年に福と知恵が多くあるようにと祈ります。

台北駐日経済文化代表処のと張瑞麟顧問が参加して下さいました。初めての訪問にも関わらず、張顧問は道場の雰囲気とボランティアの親切さに感動し、心が落ち着いた、と語りました。

パーカー智美さんは、慈済の世界大蔵経の日本語吹き替えに協力しました。彼女は「ボランティアの尽力と大いなる愛に満ちた精神を見て、人生をこれほど美しく生きることができるとは思いませんでした！本当に感動的で、今も涙が止まりません」と感動を述べました。

一月十三日から、日本の慈済ボランティアは、震災の被災地に赴き、温かい食事を作りました。また、東京、大阪、東北

のボランティアは街頭募金を始めました。新年にあたり、私たちは災害のない世界とすべての人の平安を祈りました。

第二場：中文班の祈福感恩会

「愛は見えない言葉、愛は触

れられない感覚、愛は我々の小さな願い、あなたがいつも安全で幸せであることを願っています。」二〇二四年二月四日、この日は一年に一度、人文教室の子供たちのために特別に準備されたミニ版の祈りと感謝の会です。最初に、慈済日本分會の三階の仏堂で、人文教室の親と子

善の思いを植え、苦しみを見、祝福を知り、善い種を撒く

日本分會の人文教室での祈福感恩会では、静思語の教育と実家に戻った際の竹筒募金活動を組み合わせています。これにより、子供たちも愛を広める善意の種となる機会を持てるようにと願っています。

活動中、画面を通じて元日に能登半島で発生した地震の被害を見て、子ども達の顔には心配の表情が浮かんでいました。中級クラスの学生、張皓怡は「被災者のみなさんがこんなに不便な生活を送っているのを見る

と、自分は本当に幸せだと感じます」と語りました。

祈福感恩会の終わりに、皆で被災者たちのために祈り、竹筒を開け、皆の寄付を集めて力を結集し、災害地の再建に貢献できることを願いました。「助けが必要な人を助ける、これはただの小さな気持ちです」「寄付は少ないですが、何か助けになれば」親たちもみんないっしょに祈福感恩会に参加しました。

静思言語教育と祈福感恩会を組み合わせることで、子供たちが自分が持っている愛と幸福の心をより大切にし、愛を広げる人になることができると信じています。

第三場：東北地区の祈福感恩会

一月十二日、十五人のボランティアグループが宮城県東松



■ 1. 入經藏演繹を披露。写真 / 慈涓

■ 2. 子供達が被災者募金箱を手にして応援している。写真 / 洪秀瑩



■ 路上生活者に生活物資を配布する。写真 / 孫素秋

関西地区の冬期配布活動 一日一善 少額で大きな愛

訳 / 吳翕輝 文 / 施燕芬

十二月十三日、関西地区の慈濟ボランティアは寒さに屈せず、冬期配付活動を行うため、新宮駅に集まりました。

配布品は下着、長ズボン、タオル、靴下、マフラー、毛布などです。さらに、路上生活者に台湾の温かみを少しでも感じて欲しいとオレンジとパイナップルケーキを用意しました。

エコの観点から、ボランティアは、ビニールバッグの代わりに、麻紐で防寒用の衣類やズボンといった配布品を結びつけ、また、新年用のカードを現場で作成し、安全で良い新年を迎えるように願いを込めました。

午後四時、日雇い労働者達は、行列し配布品の受け取りを待っていました。ボランティアが、「この活動は台湾の慈濟基金会から皆さんへの関心のしるしです。」と挨拶しました。

で祈福感恩会を開催しました。東北の天候は変わりやすく、時には細かな雨が降り、時には日差しが強くなりました。

一月十三日

東松島あおい西集会所

東北最初の祈福感恩会は、東松島のあおい西集会所で開催されました。会長の小野竹一氏は早朝から来て、皆さんが物資を集会所に運ぶのを指導しました。ボランティア達は独自のアイデアで会議テーブルに青い布を敷き、茶席を設けました。一瞬にして、それは厳肅な茶会会場になりました。

■ 3. 石巻の市長もボランティアと一緒に灯を持って世界平和を記念する。

写真 / 李月鳳

■ 4. 現地の人が手を振ってお別れの挨拶をしてくれた。

写真 / 李月鳳

町の人達が次々とやってきて、「竹筒」を手に実家に戻ります。「本当にお久しぶりです、お元気ですか？」と強く抱きしめ合い、四年ぶりの再会を懐かしみました。

高橋宗也宮城県議会議員は、慈濟ボランティアが能登地震で石川県の被災地に既に到着していると感じて感動しました。災害が発生した後すぐに現地に駆けつけるのは非常に印象的です。3・11地震のとき、最初に受け取ったのは、慈濟からの見舞金で、忘れられない経験なのでした。

地元のボランティア、亀山千代志さんは、現在開催されている茶会、料理教室、絵葉書やおみくじなどのイベントに参加しています。皆さんが得意な分野や興味で互いに交流でき、大歓迎とのことでした。

朝早くから住民が続々とやって来ました。竹内妙子さんは自ら収穫した米を持参し、慈濟との結縁を希望しました。

石巻市長の齋藤正美は、初めて慈善活動に参加しました。彼は、今日は心静かに感謝の心を持って参加しました。慈濟からの暖かい支援を受け続け、今日があるのはみなさんのおかげで、この大愛の精神は忘れたことも忘れることもありません、と述べました。

グストの丹野清議員は、石巻のために慈濟が行ってきたすべてに心から感謝している。最近の能登地震で慈濟がすでに物資を送っていると聞いて、災害が起こったときはお互いに助け合おうべきだ、そのような愛の精神を忘れてはならない、と語りました。

路上で夜を過ごす人達でした。

愛隣シエルターの新しい責任者である田島幸徳さんは、ボランティアに感謝を表しました。「これまでずっと皆さんの支援を受けてきました。温かい食事の提供も含め、これ以上の支援を求めることはできません」。

台北駐大阪経済文化事務所の楊慧萍課長は「西成区の労働者にとっては、まさに雪中送炭の意味があります、とその感動を話しました。

今年日本に来たばかりのボランティアには、熱帯地帯から来た方もいます。彼らは初めての冬を経験し、「下着類の配布はとても大切だ」と気づきました。また、物品や食事の配布を使命と考える人達もいました。このことは、無償の奉仕の精神を最もよく示しています。

関東地区冬期配布活動

寒冬に心を込めて
街友に温もりを

訳 / 朱家成 文 / 陳雅琴・慈涓・黃韻璇

十二月の関東地方は寒く、路上生活者を心配する私達は、毎年冬用の生活用品や温かい食べ物物の配布を行っている。今年は東京の代々木公園、埼玉県川口市、神奈川県寿公園で実施した。



■ 新芽奨学生が炊き出しの奉仕活動に参加。写真 / 陳詩萍

新世代の若いボランティアへ
つながる思い

東京代々木公園での炊き出しは十四年目に入り、日本人ボランティアも長年頑張ってきた。今年は温かい食べ物と冬用の生活用品を十一月二十八日と十二月四日の二回に配布しました。援助を受ける彼らの中にはボランティア達の影響を受けて、いつもは受け取るために上に向けているその手を下に向けて、人々を助けられる人になった人もいます。

最初は一人か二人、機材の運搬や食器の回収を手伝ってくれただけでしたが、今では十数人に増えています。「竹筒歲月」に賛同して彼ら自身の少しのお金を寄付してくれたり、現場の清掃にも協力してくれました。それはまだ微かな蝋燭の灯火のようですが、しっかりと自分と周りを照らしています。

老練のボランティアは、新世代の若いボランティアに自分達の経験を教えます。新社会人になった長野輝さんは、与える事から感謝の気持ちを学び、たまの休暇でも手伝いに来ます。新芽奨学金奨学生の加藤優太さんは四回のボランティア活動に参加し、ボランティア達がいっても丁寧に活動を実行するのを見て、この学びの機会を感謝してくれました。

料理人でボランティアの眞壁知裕さんは早朝に厨房で温かい料理を作ると、そのまま服を着替えて一緒に現場へ向かいます。初めて配布活動に参加した人文教室の林佳蓉先生は、簡単に思えたご飯の配布も、予想以上の人数の人にきちんと配布するのは即応力の試験のように感じたそうです。誰にも活動の機会があり、そこに善の種が芽生え始めています。

川口駅で温もりを届ける

東京近郊の埼玉県川口市は、都心から車で約三十分程の距離です。川口駅近くに住む十人程の路上生活者を二〇二〇年より地域ボランティアが月二回、夜の時間帯に訪問しています。

十二月八日、路上生活者へ暖かい食料と防寒用品を配布しました。六人のボランティアが地下通路に入ると、彼らはまるで親友のような笑顔で挨拶してくれました。その中の一人は二日前に防寒用品を全て盗まれ、どうやって冬を越すのかと心配していたところ、ちょうどその時に防寒用品を配りに来てくれて、本当に感謝すると言いました。ボランティア達も彼を支援する事ができ、とても嬉しかったです。

さらにボランティア達は通路を出て周りの路上生活者を探言ってくれました。毛布を高く差し上げて「ありがとう、今日からこの毛布を使います！」とボランティアに声をかけてくれる路上生活者もいました。

執行長の許麗香は配布会をスムーズに、効率的に実行するために、努力してくれたボランティアに感謝を伝えた。路上生活者達が温かい気持ちになってくれば、それはボランティアの心が人々に伝わった事だと話しました。

今年、関東地方での配布活動には約百人のボランティアが参加し、合計三四〇人の路上生活者を訪問しました。活動に参加したなかには、母親と親子で配布をした高校生の江紘毅さん、初めて参加した会社員の梅田美里さんもいました。慈濟の植えた善の種、それはまたいつか開花するであろうと期待しています。



■ 慈青の江原宏益は休日を使ってに奉仕活動をする。写真 / 黃韻璇



■ 盗まれた防寒用具の補充をするボランティア。写真 / 慈涓

していると、公園の奥に六十三歳の佐藤さんを見つけました。早速おにぎりやパン、防寒用品等を渡すと彼は、仕事中に怪我をして働けなくなり、お腹が空くとお店の無料キャンディーを食べたり、公園の水を飲んだりしていたと話してくれました。佐藤さんは言葉をつなげて「今日のおにぎりやパンはこの一ヶ月半で三回目の食事だ。この数日誰とも話をしていなかった。話しかけてくれて感謝している」と言ってくれました。

神奈川県寿公園 一期一会の
「祈祷」 善の縁を繋ぐ

関東地方横浜方面にいくつある路上生活者が集まれる場所の中で寿公園に来る約半数の人が障害者であり、平均年齢は六十五歳以上、給付金をもらっている低所得者も多く住んでいるため扱いは「福祉通り」と呼ばれています。

慈濟日本分會では十年前にここで冬季配布会を開催した事があり、困窮した路上生活者がいる事を知っていました。今回は寿公園管理部門の担当者へ連絡し、十二月九日に冬期配布会を開催する事を決めました。配布するのはみんなで作ったお弁当百五十個に靴下、防寒着、カイロさらにペットボトルをリサイクルして作った温かい毛布など、たくさん用意しました。

配布の前には全員で日本語バージョンの「祈祷」を歌い、皆が他の人のために祈る事ができるように願った。公園に来た路上生活者のひとり「慈濟のようなボランティア団体を見た事がない。「祈祷」を歌ったら魂も癒された」と言われました。またひとりのおばあちゃんは日本語の静思語を渡されて、手放す事ができなかった。最初から最後まで声を出して読んで、静思語の内容は全部意味深いと

12月寒い冬の中 心も身体も温まる味 年末の団樂に感謝

訳 / 真鍋誠 文 / 陳雅琴

慈濟が冬に実施する配給、及び「圍爐」は寒冬のなか身体だけでなく心も温まるようにと願ひ行います。



■ 団樂の食材を準備するボランティア。写真 / 吳孟儒

「圍爐」は大晦日に一家団樂とする食事です。今年、日本分會は「圍爐」を開催しました。大愛食堂の方々や新芽奨学金受給者の人たちなどを招き、一緒に食事をしながら楽しい時間を過ごしました。

ボランティアの思道は「上人が慈善活動を始めてから、その縁ある人を家族とし、自らが余裕がない時でも、足りない米を借り、油を借り、縁を結んだ人へ食事を準備します。そして毎年の年末一緒に「圍爐」をするのです」と話されました。

同じ志を持ち協力し合えば
その力は大きい

日本分會ではボランティア達での「団樂」をする事はありませんでしたが、それ以外の方を招く事は有りませんでした。実は数年前から縁を結んだ方々を招いての「団樂」を考えていたのですが、コロナ禍を考慮し控えて

いました。それでも慈濟は「最も大きな家族」と思いを持ち続け、その家庭の温かさを感じて欲しいと思います。

今年の「圍爐」の準備はとても大変でした。招待者選定、食事の膳立て、会場のセッティング、ボランティア達の役割分担等々、これらすべてが挑戦でした。限られた空間に机を並べ、机上に料理を配膳、その上でお互いの距離が遠すぎたはいけません。そしてより多くの人が参加できる様に熟慮しました。料理はメニューだけでなく、人数の変動にも対応可能な方法を考えなくてはいいませんでした。

食の輪は法の輪を回す

「圍爐」を始める前、担当ボランティアは料理が余るのではないかと心配していました。しかしそれは杞憂となり、一皿も一皿と追加になり、料理担当のボランティア達を喜ばせる事

となりました。食後のイベントは「結縁品渡し」です。くじ引きで受け取る人を決めながら、選ばれた人は自己紹介や新年の希望、話したい事など発表しました。会場には笑い声が溢れ心温まる雰囲気になりました。

■参加者の声

鈴木一也さん：鍋料理の多くの物が初めて食べた物でした。特にタロイモとチャーハンが美味しかったです。もう二年間、大愛食堂の弁当を頂いています。弁当は美味しく、助けになります。今日の活動の雰囲気にとっても幸福感を感じました。来年は今年より良い年に、そして一年健康に過ごせるよう努力します。

新芽奨学金受給者 北村矢さん

今日の料理はとても美味しくて、心が温まりました。そして一番嬉しかったのはこんなに

多くの人とお話が出来た事です。この一年、数回ボランティア活動に参加し、色々な人とふれあい話をする中で、今までの自分の考え方が変わりました。色々な良い行いをする、それはボランティア活動が幸福を感じさせてくれます。以前は自分の事しか考えていませんでした。他人の事を些細な事でも思う事ができませんでした。私は慈濟と出会え、ボランティアになり、そして他人の為に行動できる事がとても嬉しい事です。

新芽奨学金受給者 永井楓花さん

ここへ来た時は何も分かりませんでした。初めて台湾の方とふれ合って、言葉も通じず怖かったです。でも皆様は家族に接するように歓迎してくれました。ボランティアとして何度か参加し、皆様にも覚えて頂き、そしてお互い一緒になって行動させて頂き、行動すればするたび楽しくて嬉しかったです。

町田デザイン&建築専門学校学 事部 館池啓孝次長

今年の新芽奨学金受給者は全員出席しました。年末にあたり感謝の心を述べさせて頂ける事に感謝します。来年も新入生を迎える事となります。在校生と手を携えこれからも慈濟と更に深く行動する事と交流する事を期待します。

弛まぬ愛は大愛に満ち溢れて

邵良運さんの仕事はシェフでした。飲酒後のただ一度の過失により三ヶ月間昏迷しました。その後の入院期間中に通訳を兼ねていた病院の中国籍職員は転勤となり、医師と言葉も通じなくなり、病院の紹介で慈濟へ連絡したのです。そして二〇一六年から今日に至るまで慈濟ボランティアは変わらず寄り添っていました。長期のリハビリにより体調も少しずつ良くなってきました。邵さんの奥さ

許麗香執行長より

「圍爐」は精舎での上人の理念の延長です。その想いから年末の圍爐の温かさを学べるように日本で開催しました。以前にも圍爐を開催した事はありませんが、今回は新型コロナが齎した暗い影を一掃したい思いで、大愛食堂に新芽奨学金受給者、サポート家庭の人達を招待しました。慈善の行いを、浮き草の様ではなくもっと深く深く根を伸ばしましょう。ただ愛を表すだけでなく、もっと深く、もっと

多くの愛を出しましょう。

執行長はみなさんを招待するとした時、本当は心中不安で心配がありました。しかし参加した皆様が最初から笑顔が絶えず、最後まで食事を楽しんでくれるのを見て嬉しかったと言われました。和氣藹々の雰囲気の中、ある九十五歳のご高齢のおばあさんが今後の人生を期待して毎年参加します、とおっしゃってくださいました。今後いつまでかは分かりませんがこれは彼女が自分の命に対する一種の期待となったようです。

知らない人どうし隣に座り一緒に鍋を囲む、期待と幸福がじわじわと溢れてきます。鍋にする食材はだれもが普通に手にする事ができます。心の中の大愛もいつでも発揮する事が出来ます。だれもが普通の日々を送るなか多くの心配事があります。でもそこには人間の温かさが必ずあります。



◎ 石巻市 駅前

東北では早くも1/14から石巻駅前
で街頭募金活動を行いました。寒
さ厳しい日ながらも、参加ボラン
ティアの中には持病を抱え持つ者
もいれば、友人に声かけて、共に
力を合わせて善の心で被災地を応
援しようと集いました。

◎ 写真 / 張君



◎ 東京都 新宿区

都心では1/21 から 1/26 毎日午後
におおよそ 57 名のボランティア
が新宿駅西口と新大久保駅にて
街頭募金活動を繰り上げました。
「10 円でも 100 円でも能登へ愛
を届けよう!」呼びかけに街角から
支援の力が集った。寒さの中、
街頭に立つボランティアの中には
昼休みを中抜けして参加したり、
退勤後にかけつけたりと様々です
が、街角で心を一つに支援の機
会を逃さず、そんな人々の無私
な優しさは街頭で見た最も美しい
風景となりました。

◎ 写真 / 高峻喆



災難来てすぐに愛を届けることは重要です。慈濟ボランティアは被災地での
炊き出しの他、各地で街頭募金を通して共に力を合わせて能登半島支援への
呼びかけてをしてきました。

◎ 大阪市 阿倍野区

大阪では 1/28 から 2/6 までの間、
天王寺駅と難波駅前の高島屋広場
にて 5 回の街頭募金活動におおよ
そ 30 名のボランティアが集いまし
た。活動前は事前に警察に届け出
する他、毎回の参加上限人数は 5
名と定まりある中、人の行き交う
駅前でボランティアは防寒に手袋を
つけ募金箱を抱え持って一列に並
び「能登地震災害支援、ご協力よ
ろしくお願いします!」の掛け声を
反復し、募金に応じた街頭の人々
には力いっぱい「ご協力ありが
とうございます!」と心からの感謝
を声にしてお礼をした。

◎ 写真 / 孫素秋



◎ 群馬高崎

2/5 に群馬の地区ボランティアを含
めて5名、高崎駅東口にて能登支援
の街頭募金活動を行いました。降
雪で寒い日でしたが、温もりあるボ
ランティアは「意義あることをして
いる」と機会あればまた参加した
いと感想を残しました。

◎ 写真 / 明泓





合心協力 傳播溫暖

一月十四日，慈濟在穴水町的穴水綜合醫院，展開了另一個提供熱食的據點。對象除了避難所的鄉親之外，還有大部分也受災的穴水綜合醫院的同仁，以及從其他縣市前來穴水町支援的醫師、護士、保健師、營養師等醫護人員。攝影 / 周利貞